特集 2：グローバリゼーションと持続可能なメディアの デザイン —意識とモビリティーズ

慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
専任講師 小川（西秋）葉子

本研究プロジェクトの目的は、メディア・コミュニケーション研究におけるモビリティーズ概念の理論的有効性とそのアプローチの持つ多様性と可能性を探り、心理学・地理学・社会学・生命学などと接続をはかることにある。

モビリティーズ概念の主唱者であるアーリによれば、モビリティーズ・パラダイムとは以下の13の諸特徴をもつ。

1) あらゆる社会諸関係はさまざまな「つながり (connections)」を伴っており、つながりにはさまざまな程度の「距離の隔たり」、固さ、強さがあり、しばしば物理的な動きが見られること、2) 5つの相互に依存し合った「移動」があり、そうした移動が、隔たりを越えて組織される社会生活 (social life, 社会的生命, 補足筆者) を生み出し、その輪郭を形成して (さらには再形成して) いること、3) 物理的な旅行には、動かしにくい身体、傷つきやすい身体、老いた身体、ジェンダーや人種による差別を受けた身体などが見られ、これらの身体が他の身体、物、物理的世界と多感的に遭遇していること、4) 決まった時期や断続的になされる対面でのつながりと会合が、しばしば長距離を移動することで起きていること、5) 塊状の身体を有し、断続的に動く人口集団に「統治心性 (governmentality)」を及ぼそうとする国家に対して、距離の隔たりが大きな問題を投げかけていること、6) 物、人、情報を直接的ないし間接的に動かしたり妨げたりするさまざまな有形物 (「自然」と「テクノロジー」を含む) を通して社会生活 (社会的生命) が構成されていること、7) この関係を分析する上で決定的に重要なのが、変わりゆく環境が行動、運動、信念やさまざまな機会をどのように「アフォード (afford)」しているのかということ、8) 人、活動、物を時空間のなかで時空間を通して散開 (distribute, 分散, 補足筆者) させているさまざまなシステムの分析が必要であること、9) 移動システムの組織化の中心には、さまざまな空間的範囲と速さで人、物、情報を循環させるプロセスがあること、10) 以上のさまざまな移動システムとその経路は、しばしば強力な空間的固定 (spatial fixity, 空間的回避, 補足筆者) によって時が過ぎても消えることなく残存していくこと、11) 移動システムを支える知識形態が次第に専門性と疎外性を高めていること、12) 相互に依存し合う「不動 (immobile)」の物質世界のシステムと、このほか動きの

ないプラットフォーム（送信機，道路，ガレージ，駅，アンテナ，空港，ドッグ）が複雑的適応系の形成を通して移動の経験を構造化していること，13）最後に，シリーズ・システム（series systems）とネクサス・システム（nexus systems）の区別が重要であることなどである（ジョン・アーリ，2007 = 2015，『モビリティーズ』，作品社，400-401頁）。

過去における関連プロジェクトにおいては，「リサーチ設計とその実践」を主眼におき，生命における可塑性であるダイナミック・インスタビリティという概念を多様な生命の私たちと機能において考察した。その成果は，小川〔西秋〕葉子・太田邦史編（2016）『生命デザイン学入門』（岩波書店）において出版された。前回の関連プロジェクトでは，そのような知見を「ケイパビリティと移動」という観点からさらに具体的なメディア分析に応用し，研究・教育両面において貢献するために小川〔西秋〕葉子・是永論・太田邦史編（2020）『モビリティーズのまなざし：ジョン・アーリの思想と実践』（丸善出版）を上梓した。

本年度は，上記の2編著において提起された諸論点を意識とモビリティーズという観点から発展させることを目指している。このような目的のもと，本研究所の紀要『メディア・コミュニケーション』73号の「特集2」では4本の論文を掲載する。はじめの1本は，ナショナルな単位を社会的な分析対象とする方法論的ナショナリズムに対抗して唱えられたモビリティーズ概念（小川〔西秋〕葉子，2017，「モビリティ」，日本社会学会社会学理論応用事典編集委員会編『社会学理論応用事典』，丸善出版，542-543頁）に難民というアクターの意識からあらたな示唆を加えようとするものである。この河合論文は，都市間，または国家間を移動する難民とモビリティーズの関係についてハンナ・アーレントに準拠して論じ，彼女の難民論を体現するチャップリン映画批評に即して解説する。ここでは，アーリに多大な影響をあたえながらも，あまり注目されることのなかった社会学者ジグムント・バウマンのモビリティ論によって，これまでの議論にアーレントの難民論を接続する。

それに続く3論文は，『モビリティーズのまなざし』の編集プロセスで顕著となったコロナ・ウイルスの感染拡大について，意識と情報行動の観点から掘り下げる試みである。すでに上記の編著ではすべての章でコロナ禍という非常事態がモビリティーズ概念の変容を迫る現象として論じられた。さらに，橋元・堀川・大野・天野らによる調査報告3本はメディア接触を自粛行動，デマ情報の流布，政策評価や投票行動，さらにコロナ後の行動様式といった諸論点と関連させる貴重なデータを提供する。『生命デザイン学入門』でも人間の体内の腸内細菌を動物や植物が生息する叢としてのフローラのようにみなす発想が紹介された。コロナ禍の拡大とその収束のサイクルにおいても生命と生命の棲み分けや相互作用にみられるモビリティーズを変容させる情報行動の可塑性がみてとれる。

以上のように難民とコロナ禍という具体的なトピックに基づいた事象の分析は，モビリティーズ概念の今後の発展と修正をもたらすものといえよう。とりわけ，今回執筆された諸論文は，モビリティーズ・パラダイムにおける3)，5)，6)，7)，8)の諸特徴を敷衍する成果をもたらしたと評価できる。このような発見を19世紀アメリカの生理学と心理学の始祖ウィリアム・ジェイムズによる意識の可塑性をめぐる議論に接続させてゆくことが今後のプロジェクトの課題となると考えられる。